

# 平成30年度 研修員個人研究 研究概要

平成30年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究概要は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究概要
情報化推進班	井手 宏暢	県内の教職員が利用しやすいと感じる長崎県教育センター公式Webページの作成 ～Webユーザビリティの視点を踏まえたWebページの改良を通して～	平成29年度の研修講座受講者に行った長崎県教育センター公式Webページに関するアンケートで、「分かりにくい」や「利用しづらい」との回答があった。 本研究では、「分かりやすさ」と「利用しやすさ」を意味する「ユーザビリティ」の視点から長崎県教育センター公式Webページを作成・運用・管理するための運用手順書を作成した。その中から、重要項目だけに絞ったWebページを評価するための指標と、Webページを作成・運用するためのマニュアルを作成し、分かりやすく、利用しやすいWebページになるように改良を重ね、検証を行った。
	阪口 昌雄	課題を解決する力を育成するプログラミングの題材研究 ～計測・制御のプログラミングの題材開発と発信を通して～	新学習指導要領では、中学校技術・家庭科技術分野におけるプログラミングの内容が高度になった。従前の「プログラムによる計測・制御」に「システムの構想」が追加され、さらに「生活や社会の中から問題を見いだして、課題を設定し、解決する力を育成する」という規定も追加された。 本研究では、新学習指導要領に対応した題材を開発することで、県内の技術教育に関わる教員の一助となることを目的とし、開発した題材を中学校技術教員に紹介した。そして、得られた意見を基に題材の改善を行った。
	吉田 裕一	プログラミング的思考を育成する授業モデルの作成 ～プログラミング学習ソフトを活用した算数科の授業づくりを通して～	2020年度から小学校においてプログラミング教育が全面実施されることから、本研究では、プログラミング教育の取組状況等や新学習指導要領における位置付けについて整理した。また、プログラミング的思考と算数科の内容との関連付けを図りながら、プログラミング学習ソフトを活用した授業づくりを行い、初めてプログラミングの授業を行う教員でも実践可能な授業モデルを作成した。 さらに、研修講座の受講者への模擬授業を通して、授業モデルにおいて活用したプログラミング学習ソフトが有効であるか、児童のプログラミング的思考の育成につながるか検証した。

# 平成30年度 研修員個人研究 研究概要

平成30年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究概要は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究概要
義務教育研修班	久家江光子	即興で伝え合う力を育む中学校外国語科の授業づくり ～小学校外国語教育との円滑な接続を図った授業実践を通して～	予測困難な時代において、子供たちが様々な変化に向き合い、他者と協働して課題を解決していくためには、中学校外国語科において、その場に応じたコミュニケーション能力、いわゆる「即興で伝え合う力」を育むことが重要である。本研究では、小中接続の視点等を取り入れた単元構想と学習指導案を作成し、目的、場面、状況を明確にしたやり取りを軸とする言語活動を取り入れた授業づくりを行った。さらに作成した単元構想と学習指導案を基に、検証協力校において授業実践を行い、その有効性について検証した。「即興で伝え合う力」を育むための授業改善の具体的な方策として提案する。
	高橋 利昌	主体的・対話的で深い学びを実現する中学校数学科の授業づくり ～学びをつなげ広げる関数領域の単元構想を通して～	平成29年度全国学力・学習状況調査の結果から、長崎県は「数学的な表現を用いた説明」に課題があることが分かった。さらに、新学習指導要領解説においても同様に、課題として示されている。そこで、本研究では、「関数 $y=qr$ 」の単元において、本県の課題解決を目指し、数学的な見方・考え方を働かせ、学びのつながりを意識した単元構想を作成する。さらに、説明し伝え合う授業を計画的に設定し、問題解決の方法や理由を説明する場面を設定した授業改善を目指す。本県の教師が、学力に係る課題改善を図るための一つの参考とするべく、作成する過程や成果物を一つの事例として提供する。
	田中 文章	小学校算数科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善 ～算数科のグランドデザインを基にした数学的な見方・考え方を働かせる単元構想を通して～	新学習指導要領では、資質・能力を育成するための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の鍵として、見方・考え方が示されている。そこで、本研究では、教育課程全体を通じた資質・能力育成のグランドデザインと算数科のグランドデザインを構想した上で、数学的な見方・考え方を働かせることを意識した単元構想を作成し、児童が数学的な見方・考え方を働かせるための問いや手立てを設定した授業展開案を作成した。その上で、検証協力校における授業実践を基に、研究の成果と課題を捉え、考察した。
	三根 健	中学校理科における主体的・対話的で深い学びを目指した授業づくり ～科学的に探究する学習活動の充実を通して～	中学校理科における、科学的に探究する学習活動の充実を図る授業改善に向けた研究を行った。「電流とその利用」の単元において、引き出したい生徒の反応を想定し、その反応を引き出す教師の関わりを位置付けた単元及び授業構想に係る資料を作成するとともに、作成した資料を基に授業実践を行い、有効性を検証した。主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、学びにおける生徒の具体的な姿を想定することから始める授業改善について提案する。
	瀧下 哲哉	変化の激しい時代に向き合い、社会を主体的に生きる資質・能力の育成を目指した社会科の授業づくり ～新たな視点で思考を揺さぶり、学びを深める学習の在り方～	本研究は、発問や資料等によって新たな視点を示すことで、生徒を揺さぶり、その内面に生じた問いから新たな課題を追究することで、学びを深める学習の在り方を提案するものである。研究に当たっては、「発問」や「問い」、「課題」について整理し、それぞれが学びが深まる過程において果たす役割について考察した。そしてその実践として、歴史的分野の単元「近世の日本」を題材に全17時間の授業構想を行い、どのような資料を用いてどう発問するのか、生徒の揺さぶり方にはどのようなものがあるのか、その際に働く見方・考え方はどのようなものがあるのか等について探究・考察した。

# 平成30年度 研修員個人研究 研究概要

平成30年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究概要は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究概要
義務教育研修班	松本 幸子	中学校美術科における生徒を学びへと誘う題材と年間計画モデルの研究 ～実社会での必要性を実感できる表現と鑑賞を関連付けた題材の構想を通して～	国立教育政策研究所の調査分析より、美術科における学びが、普段の生活や社会に出て役に立つと感じている生徒の割合が低いことが示された。また、日本美術教育学会の全国調査では、実施される指導内容の偏りが指摘されており、指導事項を網羅できていない現状が明らかとなっている。 そこで、本研究では、問題の要因を考察し、各学年・各題材で育成すべき資質・能力を整理し、系統性を意識できる年間指導計画モデルを作成した。また、生徒が学ぶ必要性を実感できる表現と鑑賞が関連付く「2段階鑑賞」を用いた題材を構想し、その成果と課題を明らかにした。
	林田 由美	確かな学力を身に付けた子供を育てる小学校国語科の指導 ～自己の考えを形成し、深め共有する学習過程を意識した授業づくりを通して～	小学校国語科における、確かな学力を身に付けた子供を育てる学習指導について研究を進めた。具体的には、「読むこと」の領域において、「考えの形成」に至る各過程のねらいや身に付けさせたい資質・能力を明らかにした授業づくりについての理論研究を基に、理論を具体化した単元構想や学習指導案を作成した。 作成に当たっては、「各過程のねらいや身に付けさせたい資質・能力を明確にすること」「『考えの形成』に至る学習過程に必要な要件を整理すること」の二点に留意した。なお、研修員カンファレンスや公開授業の授業参観を基に、研究の成果と課題を客観的に捉え、考察した。
	吉田真美子	自らの生き方を探る文学的文章の読解を系統的に位置付けた中学校国語科の授業改善 ～言葉による見方・考え方を働かせるための問いの工夫を通して～	新学習指導要領では、子供たちがよりよい社会や人生を創り上げていくための資質・能力を三つの柱に整理し、国語科においても、社会生活につながる力の育成が示された。 本研究では、文学的文章における読む力を育み、自らの生き方に生かそうとする態度の育成につなげたいと考え、授業改善を行った。文学的文章における主題は、生徒一人一人が自らの生き方を考える糧となっており、人生観を広げ深めるものである。言葉の意味を吟味して正確に読むことを通して主題を捉える学びにつなげる授業改善に向けて、言葉による見方・考え方を働かせるための問いを工夫し、主題について考えを深める授業展開を仕組むことで、主題を正確に読む力を高める。さらには、学びを自らの生き方に生かそうとする態度の育成につなげる単元構想案を作成した。
	松本栄太郎	同和問題の解決に向けた学習の推進 ～部落問題学習を取り入れた授業づくりの工夫を通して～	学校現場では、同和問題に関する授業において、部落問題学習に対する知的理解に大きな課題があると考えられる。また、「部落差別解消推進法」第五条に「教育及び啓発」を推進することが謳われていることから、学校教育における部落問題学習の必要性が窺える。 そこで本研究では、「平成30年度地区別人権教育研修会」において、小・中学校社会科における部落史学習の授業改善を目的に、「人権教育をすすめるために第50集」（平成30年度県教委発行）を活用した研修プログラムを実施し、参加者の自己評価の数値や感想から、教師の同和問題に対する知識と意識の「学び直し」として効果的であったかを検証した。
	本多 直純	「進路・学力保障」に向けた研修プログラムの提案 ～体験的参加型学習と講義・演習等を通して～	近年、子供を取り巻く課題の一つに「子供の貧困」があり、この課題を解決することを目的とした「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が2014年1月に施行された。 その中に「学校」が総合的な子供の貧困対策のプラットフォームに位置付けられるなど、子供が貧困から抜け出すことに関わる学校教育の役割は大きいと考える。 そこで、本研究においては、子供の貧困問題やその対策に関する法律・制度等を学校教育の立場からどのように理解し、推進していけばよいのかについて研究を深めていく。それを基に、教職員の研修プログラムを作成するとともに、研修会等において実施する。また、参加者の自己評価や感想から、教職員が子供の進路・学力を保障するための研修内容として効果的であったかを検証していく。

# 平成30年度 研修員個人研究 研究概要

平成30年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究概要は以下のとおりです。

所屬	氏名	研究主題及び研究副主題	研究概要
高校教育研修班	佐藤 智子	キャリア発達を促す家庭科教育の在り方 ～検定を活用したフードデザインにおける授業改善～	キャリア教育を効果的に推進するためには、教科においてキャリア教育の「基礎的・汎用的能力」を育成することが必要である。昨年度の研究において、家庭科のキャリア教育の「基礎的・汎用的能力」を明らかにした。その中で「自己理解・自己管理能力」は家庭科の授業の中で直接的に育成が図りにくい能力であることが分かった。そこで「自己理解・自己管理能力」を育成する手段の一つとして、家庭科技術検定の活用が効果的でないかと考えた。調理実習において、家庭科技術検定の評価基準を基に作成したルーブリックを用いて、生徒が自己評価・相互評価を行うことにより、知識や技能の習得だけでなく、キャリア発達を促すことができると考え実践事例を作成した。さらに、実践協力校で実践を行い、成果物の有用性を検証した。
	水谷 綾子	主権者意識を高める公民科の授業づくり ～現実社会の諸課題について意見形成する活動を通して～	選挙権や成年年齢の18歳引き下げといった社会の変化を背景に、若者の積極的な社会参画が重要な課題となっている。それに伴い、公民科ではこれまで以上に主権者教育の視点に基づいた授業実践が求められる。生徒の主権者意識を高める授業づくりにおいて、有効な手立てとは何か。 本研究は、公民科「政治・経済」における、現実社会の諸課題について意見形成する活動を取り入れた授業づくりと、その計画的・継続的な取組について、具体的な授業・年間計画を作成し、実践検証した結果をまとめたものである。
	田中 純子	生徒が論理的に思考し表現する能力の育成を目指して ～高校理科（生物）における「問い」と「形成的評価」を通して～	高校理科（生物）は、学習内容が広範囲にわたるため、覚えるべき知識を羅列し説明する授業になりがちである。一方で、新学習指導要領には、これから生きる生徒に必要な資質・能力の柱の1つとして「思考力・判断力・表現力の育成」があり、同時に言語活動の充実が望まれているが、論述など表現することに対し苦手意識をもっている生徒は多いと考えられる。そこで、本研究では、授業において「問い」に対してのワークシートへの記述について、生徒が自己・相互評価を行うことで生徒の論理的思考力や表現力が向上するだろうと仮説を立て、学習指導案を作成した。また、作成した学習指導案をもとに前任校で検証授業を行った。
	七條 慶子	学びのつながりを意識し、統合的に考察する力を育てる数学科の授業づくり ～「つながり」を意識した学習を通して～	社会情勢が急速に変化する中、予測困難な時代を逞しく生き抜く力を身に付けることが、今の生徒たちに求められている。新たな問題を解決するためには、情報を的確に把握した上で、過去の知識や経験をもとに分析し、解決策を思考して結論を出すまで多くの力が必要となる。このような力の基盤は、問題に向かい、試行錯誤しながら解き進める数学の学習を通して育てられると考える。本研究では、既習の知識を生かして問題解決に向かおうとする意識の向上と、学びの「つながり」を実感し、統合的に考察する姿勢の育成を目的として、中学校の学習内容と「つながり」がある題材を用いた学習指導案を提案する。
	上神 佳子	論理的に対話することのできる生徒を育成する国語科の授業づくり ～「話すこと・聞くこと」の学習活動を通して～	平成28年12月の中央教育審議会の答申で「高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと、話合いや論述などの『話すこと・聞くこと』『書くこと』の領域の学習が十分に行われていないこと」が課題として指摘されている。生徒の実態としても、授業中の発表や進学・就職に向けた面接の練習において、人前で自分の意見や考えを話すことを苦手とする生徒が多く見受けられる。 本研究では、指導者が継続的・計画的に仕組む「話すこと・聞くこと」の授業づくりを提案することで、論理的に対話することのできる生徒の育成を目指すこととした。

# 平成30年度 研修員個人研究 研究概要

平成30年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究概要は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究概要
特別支援教育研修班	池田 麻希	高等学校における通級による指導の充実を目指して ～「実態把握チェックリスト」を活用した自立活動の個別の指導計画の作成について～	平成30年度から、高等学校における通級による指導が開始となった。通級による指導の指導内容は、特別支援学校における自立活動に相当し、自立活動の「個別の指導計画」に基づいて行われる。本研究では、自立活動の「個別の指導計画」の作成の最初の手順である「実態把握」に着目することとした。通級による指導の担当者が抱える課題の一つである「実態把握」の難しさを軽減するため、自立活動の「実態把握チェックリスト」を作成した。あわせて、作成したチェックリストを活用した、自立活動の「個別の指導計画」の事例集を作成した。このことによって、高等学校の教員が自立活動の「個別の指導計画」の作成に取り組みやすくなり、高等学校における通級による指導の充実に資することができるものと考えられる。
	太田 敦夫	中学校の特別支援学級における将来を見据えた生徒の進路指導・支援を目指して ～計画的・段階的な進路指導のモデル案の作成を通して～	中学校の特別支援学級における将来を見据えた生徒の進路指導には、中学校卒業後の進路までも考えた上での指導の連続性が必要であるが、現状では難しい状況にある。 本研究では、指導の連続性を図ることを目指して、進路指導のモデル案を作成した。研究をしていく中で、進路指導においてもっとも大切である内容は、自己理解であると捉えたため、モデル案では、進路指導において、どのように生徒の自己理解を促す指導を行っていけばよいのかを、「中学校知的障害特別支援学級の特別活動及び総合的な学習の時間において育てる自己理解の要素一覧(案)」を作成して示した。また、進路指導の連続性を図るため、生徒・保護者の願い等の必要な項目を示した、「中学校知的障害特別支援学級における進路指導の記録用紙」を作成した。
	中島 英子	すべての生徒が「分かる」「できる」「楽しい」と実感できる高等学校世界史の授業をめざして ～特別支援教育の視点を取り入れた、生徒を主体とする授業モデルの提案～	本研究では、「障害のあるなしに関わらず、すべての生徒にとって分かりやすい授業をめざす」というユニバーサルデザインの考え方に基づいて、すべての生徒が「分かる」「できる」「楽しい」と実感できる高等学校世界史の授業をめざし、特別支援教育の視点を取り入れた、生徒を主体とする授業モデルの検討を行った。研究内容として、基本的な学習環境の整備や授業の展開の中で取り入れられる配慮の視点について明らかにするとともに、世界史の授業の中で生徒の学びの困難さを具体的にイメージし、ユニバーサルデザイン化の観点と個別支援の観点の両面を取り入れた授業モデルを作成した。

# 平成30年度 研修員個人研究 研究概要

平成30年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究概要は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究概要
教育相談班	新田 晃弘	小学校における「考え、議論する道徳」の実現を目指した授業づくり ～内容項目の相互関係を明確に捉えた中心発問の精選を通して～	「考え、議論する道徳」の実現のための鍵の一つは、「教師が児童へ何を問うか。」であると考えた。授業改善には、授業の柱となる中心発問の精選が重要である。そこで、教材に含まれる道徳的価値（内容項目）の相互関係を明確に捉えた上で、中心発問を精選する手法を構築し、6つの段階で整理した。その有効性を実際に授業を行うことで、検証した。その結果、内容項目の相互関係を分析したことで、児童の思考の流れを事前に想定できた。授業中の児童の発言・反応・考えを真摯に受け止めながら、議論を促すことにつながった。精選した中心発問により、児童の多様な考えを引き出し、ねらいとする道徳的価値に迫ることができた。
	加藤 稚子	中学校における互いに認め合い、高め合う学級づくりを目指して ～構成的グループ・エンカウターの年間活動計画と評価シートの作成を通して～	望ましい学級づくりのための一つの手法として、温かな人間関係と触れ合いが生まれる構成的グループ・エンカウター(SGE)の活用が効果的である。しかし、学級で行うためには、教師の知識と実施のための時間の確保が必須となり、よいものと分かっているにもかかわらず取り入れにくい現状がある。そこで、本研究では、短時間で実施可能なエクササイズのみあてや内容等を整理したショートエクササイズの年間活動計画を提案した。ショートエクササイズを繰り返し行うことにより、温かな触れ合いが生まれ、よりよい学級となることが期待できる。さらに活動の評価や、児童生徒の心の変容を適切に評価するために、振り返りシートの作成を行った。
	大久保智美	高等学校におけるスクールソーシャルワーカーとのよりよい連携を目指して ～先進県の取組状況やスクールソーシャルワーカーが活用する技法から学ぶ～	社会や経済の急激な変化の中で、生徒が抱える課題は複雑化、多様化し、組織的に「チーム学校」として対応するために、学校において福祉的な視点から支援するスクールソーシャルワーカー(S S W)の活用が始まっている。高校とS S Wとの連携が進めば高校は本来の教育活動に専念でき、さらに生徒の将来的な自立につながると考え、様々な自治体の取組やS C、S S Wからの聞き取りから、具体的な連携方法を提示した。さらに、高等学校における教職員の生徒支援に役立つように、S S Wが用いる福祉的な視点や技法を整理した。

詳しい内容をお知りになりたい方は、研修員個人研究報告書が玖島の社図書館資料室（本館3階）にありますので、是非御覧ください。